

会津三十三観音・御詠歌の視覚的伝達

A2201519 鳥里 愛生

研究の背景

今年、会津三十三観音巡りが日本遺産に登録されたことにより、会津に参拝者や巡礼者が多く訪れるようになった。三十三の各札所には、それぞれの土地にまつわる伝承、仏教の教えが歌われたご詠歌(読み歌)が存在し、巡礼の際や、地域ごとに観音講と呼ばれる女性達が集まり、唱えることが慣わしになっている。しかし今日では、御詠歌を唱える人が減少し、御詠歌に詳しい年代が少ない地区があることがわかった。この状況が続くと今後、御詠歌に込められた意味が時代と共に受け継がれず、形式的に歌を唱えることで満足してしまうようになるのではないかと考えた。本研究では、それぞれの御詠歌で詠われている教えを視覚的に表現するとともに、住職や地域の人が受け継いできた御詠歌の意味を後世へと繋げていく媒体を制作していく。

研究の目的

会津三十三観音の御詠歌に関する文献は少なく、一般に御詠歌の伝達手段は口伝であることがわかった。会津の各札所は「難観音」と言われるほど、無住の札所が多い。そのため古語で書かれている御詠歌の読み手助けが一切なく、特に若い世代では御詠歌を十分に理解することができなと感じた。この状態を改善する媒体として、御詠歌の意味、読み、札所ごとの注意点などをまとめたパンフレットを作成する。蛇腹折りになっており広げると、ポスターとして大きく目を引く媒体にもなる。従来の観音菩薩や寺のポスターは、それ自体の写真を大々的に使用したものが多く、それらのポスターと差別化を図り特徴である御詠歌を生かした、写真を使わなくても各札所のイメージが膨らむ紙面にした。掲示場所として、各札所や最寄の駅、公民館、図書館などの公共施設を考え、会津三十三観音巡りがより充実したものになることを目指す。

研究のプロセス

5～7月 テーマ決定・デザイン考案

全体的なテーマとして、文字を視覚化したポスターを制作する。

御詠歌に関する改善点に基づき、口伝されてきた御詠歌の意味を紙面化することに決定した。

●デザイン考案1

各札所をイメージしたポスターを33枚制作

→あえて大きい紙面で1つの札所を取り上げる意味があまり感じられない。

8～9月 現地調査①

会津三十三観音の各札所を巡り、現地調査ならびに文献調査を行った。住職に取材し巡礼者数や御詠歌の意味を聞くことができ、素材として必要な写真撮影を行った。それにより、各札所の規模や諸説明に差があることや会津三十三観音に関する文献として残っているものでも、確かなものは少なく、それぞれに違った見解が存在していることがわかった。

10月 デザイン再考案

●デザイン考案2 <図 A>

ポスター(目に留まる)とチラシ(理解を深める)の2つの利便性を掛け合わせた新しいポスターデザイン

→1枚1枚貼り合わせると接着面が目立つ可能性がある。



<図 A>

11~12月 現地調査 再デザイン考案

夏季休業中は、住職への取材のみだったが、範囲を広げ観音講の人にも取材をした。同じ御詠歌でも違った見解があった。

●デザイン考案3 <図 B>

ポスター(目に留まる)とパンフレット(理解を深める)とし、チラシよりも読み物として充実する



<図 B>

12~1月 制作

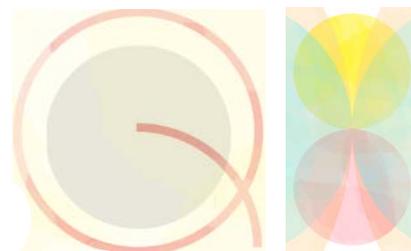
成果物(完成作品)

○パンフレット 11種類 蛇腹折り6ページ 展開630×297mm

パンフレットを組み合わせることで、様々な場所に対応したポスターとして掲載できる。

(表面) ・御詠歌と丸の要素で表現する

仏教では、丸は円に通じ“縁”と言われ、人や物事の繋がりを表している。会津三十三観音も巡礼を通して様々な県の人と出会いそこでしか感じる事のできない時間の一つ一つが縁の結ぶつきによるものだと感じた。その表現をする要素として丸を用いることにした。



素材 信仰する心や自然のぬくもりが感じられるよう、水彩で表現し、半透明でぼかしか効いたものを選んだ。

色 仏教において如来の精神や智慧を表す色の“五色”で表現し統一感を持たせる。



青



白



赤



黄



緑

(裏面) ・御詠歌の意味・直訳・札所の写真・巡礼の基本動作・読み・札所ごとの注意点・周辺地図

考察

三十三箇所にも御詠歌が存在するが、住職でさえも本来の意味がわからない札所が多く見られた。しかし、地域の人達の中では思い思いの見解で、詩に意味を持たせていることがわかった。ポスター制作では、訴えたい内容が曖昧なまま進んでしまったため、うまく表現できず何度も取材に行くようになってしまったことが、反省点である。同じ条件の中で何度もサンプルを制作することにより、発想力が鍛えられ、表現の幅が広がった。